

「小資文学」研究 ——その読者、作者、スタイル、ジェンダー化をめぐって——

要約

作成者 何憶鵠

本論文は1990年代末に中国で一世を風靡した「小資文学」と呼ばれる作品群をめぐる一連の問題について考察するものである。

中国では、基本的に「小資文学」という用語は衛慧や棉棉をはじめとする「70年代以後」作家や村上春樹が書く西洋的で都会的、個人的で脱歴史的だと言われるような作品を指す。その文学自体のみならず、その読者も作者も「小資」と呼ばれている。「小資文学」の登場は改革開放によって中国社会が大変貌を遂げた1990年代ならではの出来事であり、1990年代の中国文学・中国文化について考察する際には「小資文学」は避けては通れないテーマだと思われる。一方で、現在「小資文学」は「価値」が低いものとして周縁化されており、その上、女性ジェンダー化されているのである。そのためか、「小資文学」は1990年代における重要な文学上の事象であるにもかかわらず、それをめぐる問題は長い間見落とされてきた。「小資文学」の読者と作者はどのような存在なのか、彼/彼女らはなぜ「小資文学」のような作品を読む/書くのか、「小資文学」という文学スタイルはどのように評すべきか、「小資文学」はどのようにジェンダー化されたのか、そのジェンダー化の背後にはどのような事情があったのか。これらの問題はいずれも未解決のままであった。よって、本論ではこれらの問題を念頭に置きながら「小資文学」について考察することにしたのである。

第一章「小資」を構築する——ベストセラー『格調』と中国における中間層構築に関する考察」では、「小資文学」の主な読者と見なされている「小資」という主体が構築された過程と、「小資文学」がその過程において果たした役割について論じた。「小資」という主体の形成および「小資文学」の流行に深く関与したのは1990年代末にベストセラーになった訳書『格調——社会等級与生活品味』である。そのため本章ではこの書物に焦点を当てて考察を進めた。まずは『格調』がプロデュースされた背景に注目して、社会システムが激変するなかで多くの市民が階級アイデンティティの困惑を抱きはじめたこと、また、その状況を背景に『格調』がプロデュースされたことについて論じた。そして、「格調」はその経済力ゆえに階級アイデンティティに対する困惑を抱えるいわゆる中間層の人々に、①経済的資源の多寡の代わりに生活スタイルの「格調」を判定基準とする精神的階級観、②精神的階級観に則って階級アイデンティティを構築するための方法論、③階級の語り方、④中間層アイデンティティの構築に対して人々が抱く願望、という4つのものを示したと分析した。さらに、『格調』の延長線上に、多くの読者が後に「小資文学」と呼ばれる作品群を中間層の主体を構築するための本土化された生活マニュアルとして受容するようになったことを示し

た。上述の作業によって、「小資」という主体が出来上がっていくその過程が可視化されたのである。

第二章「『小資文学』を書くこと——『衛慧みたいにクレイジー』を読む」では、数多くの「小資文学」を書き下ろした衛慧という作家による自伝的小説『衛慧みたいにクレイジー』を取り上げて、そのテキストから「小資文学」の作者が「小資文学」を書く理由を読み取った。『クレイジー』における主人公兼語り手である阿慧の円環的、自己言及的な語りに対する分析によって、この小説は実はある「小資文学」の生成過程について記述した、いわばメタ「小資文学」であることが分かった。次いで阿慧の執筆動機に注目し、阿慧にとって小説を書くことはアイデンティティの安定化を実現させるための方法であるということについて論じた。その上で阿慧の具体的な執筆過程について考察したのである。阿慧は最初は「自分探し」のために自伝的小説を書こうとしていたが、途中で「自分探し」の小説が書けなくなり、創作に失敗してしまった。しかしその失敗によって、阿慧は「自分探し」の不可能性に気づき、「自分探し」の文学を書くことを放棄して「小資文学」という「自分作り」の文学を書くことにした。つまり、阿慧が「小資文学」と呼ばれるような作品を書くようになったのは、「自分探し」の文学を書くことが不可能であるため、また、「自分作り」の文学によってアイデンティティの安定化が実現できるためだと考えられるのである。

第三章「語らずに伝えるという方法——村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』における語りの戦略」では「小資文学」のその「小資」的なスタイルを再評価できるかどうかという問題について議論した。評論家たちは「小資文学」のスタイルはナルシシスティックで「重み」や「深み」に欠けると批判するが、筆者はそのスタイルが有するカジュアルさと軽さがかえってアクチュアルなことを読者に突き付けて考えさせるというようなこともあるのではないかと考えた。この可能性を検証するために、本章では村上春樹による「中国行きのスロウ・ボート」という短編小説を「小資文学」テキストの一例として、その語り方の特徴を分析した。この小説では、三人の在日中国人に関する物語について叙述する際に、語り手の「僕」は日中の歴史問題や社会問題に対する自分の〈意見〉〈判断〉を一切示さない。その代わりに、出来事を経験した時に感じた〈情緒〉や〈感情〉の変化をあらゆる手段を駆使して丁寧に示し出しており、それによって読者の共感を促している。そのような〈感情〉を中心に据えた語り方によって、各時代の読者は「僕」の語りに導かれ、急激な経済成長が社会にもたらした弊害や日本社会の右傾化といった、現実と関わるいくつかの主題を「スロウ・ボート」のテキストから発見できたのである。このような分析を行うことによって、「小資文学」テキストにおける現実との接続の可能性が確認された。ここで論じたことを契機に、今後より多くの「小資文学」テキストが再評価されるようになることを期待したい。

第四章と第五章では「小資文学」のジェンダー化という現象をめぐって考察を行った。

第四章「『小資文学』のジェンダー化現象に関する考察——中国における『ノルウェイの森』のジェンダー・イメージの変容および村上文学の読まれ方を視点として」では、まずは1989年版、1996年版、1998年版、2001年版という4種の中国語版『ノルウェイの森』の

異なる装丁などを取り上げて分析し、「小資文学」がジェンダー化されたことを示した。1989年版の表紙には女性のエロティックな写真や扇情的なキャッチフレーズが印刷されていた。ジェンダーの観点から考えれば、1989年の時点では『ノルウェイの森』は男性が読む「男性」的な小説として認識されたことが分かる。しかし、時代が下るにつれて、『ノルウェイの森』は徐々に女性が読む「女性」的な小説だと見なされるようになったのだ。まず、1996年版はエロティックな要素が抑えられた装丁になっており、幾分上品な印象になった。そして、1998年版は「女性らしさ」を意識した装丁になった。その表紙に印刷された優美な風景写真や、健康で穏やかな雰囲気をもつ女性の肖像写真、繊細な書体の文字などの特徴がそのことを示している。「女性らしさ」の演出に1998年版よりさらに力を入れているのが2001年版である。2001年版の表紙を飾る白薔薇の写真や落ち葉の模様をあしらった見返しなどからそのことは看取できる。以上4つの中国語版『ノルウェイの森』の装丁について分析した結果、「小資文学」は1990年代にかけて徐々に女性ジェンダー化した可能性が高いことが分かった。そのことを踏まえて、本章の後半ではさらに各時代における村上文学の読まれ方の変化に注目して、村上文学が女性ジェンダー化した背景について論じた。改革開放以降、海外の文芸理論を受容したことによって文学テキストの読み方が多様化していった。同時に、「正統文学」と非「正統文学」の差異化が起こり、「正統文学」の正統性の維持のために非「正統文学」が他者化されるようになったのである。村上文学または「小資文学」のジェンダー化はまさにそのようなことを背景としている。既に知られているように、二項対立の関係を正当化するためにジェンダーはメタファーとして利用されてきた。村上文学または「小資文学」のジェンダー化においてもこのような論理が機能していたのである。

第五章「「小資文学」をジェンダー化する知識人たち——林少華の「小資文学」観を中心に」では、「小資文学」をジェンダー化する知識人たちの精神構造の解明を試みた。具体的には林少華という翻訳家・文学者を代表として取り上げて分析した。まずはそのエッセイや論評から、彼にとっての近代と近代化とは中国の美しい風景や伝統を破壊する悪しき資本主義的近代であることと、「小資文学」とはその悪しき資本主義的近代を象徴するものであることを読み取った。そして、1990年代中国の社会・思想状況に基づいて、近代や「小資文学」に対してこのような考えをもっているのは決して林だけではなく、多くの知識人がそれを共有していたということを論じた。その後、「小資産階級」批判と「小資」批判がそれぞれ置かれた社会状況の差異から考えて、知識人たちが「小資文学」を女性ジェンダー化したのは、マルクス主義や毛沢東思想が空疎な理論になった状況において資本主義的近代と近代化を効率よく他者化して排除するためだったのではないかという結論を導き出した。

以上の考察を通して、「小資文学」の読者、作者、作品スタイル、ジェンダー化現象に関する基本的な問題を解明した。また、これまでに分析した内容から分かるように、「小資文学」の登場は、中国が社会・経済システムにおいてのみならず、文学・文化領域においても再資本主義的近代化を始めたということを示す、非常に重要な出来事だと言える。また、「小資文学」はそのテキスト内容においても、近現代に生きる我々のような人間が共通して

抱えている様々な葛藤が描かれている。一方で、「小資文学」は登場してまもなく人文系の知識人たちによって女性ジェンダー化され批判されるようになり、改革開放後の中国文学の世界で他者とされたのである。「小資文学」が他者化されたことによって、「正統文学」の正統性が維持された。1990年代以降の中国文学にはまさにこの「正統文学」対「小資文学」という二元的構造が内包されているのである。